

# なぜ資（史）料を残すのか

——「アーカイヴァル・エポケー」を超えて——

堀川三郎 法政大学社会学部

## 1. 「問い」への問い

「なぜ資（史）料を残すのか」という問いは、奇妙な問いだ。なぜなら、学問にとって「残す」ことは当然であるからだ。答えがあらかじめ決まっている。問いでありながら、それはすでにして問いではないという意味で実に奇妙であり、また陳腐ですらある。

では、自明の答えを導くに過ぎない奇妙で陳腐な問いを、ここであえて問うことの意味は何か。これを理解するためには、この問いの背景ないし前提を考えてみるのが欠かせない。

## 2. 「問い」の背景

私たちが資（史）料を保存せよと言うのは、言うまでもなく、資（史）料が散逸したり失われる危機を察知する時だが、その割に、保存されたアーカイヴスがほとんど利用されないのはどうしてだろうか。ろくに使いもしないものを残せと皆が主張するとは、一体、どうしてなのか。上述の奇妙で陳腐な問いは、このような背景を踏まえると、途端に異なる顔を見せ始める。それは私たちが研究する際に何を「資（史）料」としてとらえ、何を「資（史）料」と見なさないでいるかという点を改めて問い、社会学的分析の持つ暗黙の価値観が何かを逆照射する。社会学という営みを問い質しているかのようだ。さらに敷衍するなら、私たちが暗黙に持つ学問観がいかに関与してアーカイヴスの生成やその利用を妨げているのか、アーカイヴスの伝統を持つ諸外国の学問観と私たちのそれはどのように異なるのか、いかなる条件が整備されればアーカイヴスの生成と利用が促進されるだろうか——陳腐な問いがもたらす一連の問いは、このように重要かつ広範なものである。だから改めて問うことの意味は、社会学にとっての資（史）料論の彫琢のためであり、また、社会学という営み自体の再帰的考察への細やかな一歩だから、ということになる。もっとも、一回のシンポジウムでかように大きなテーマを扱うことは不可能である。問いの持つ広い射程を念頭におきながら、ここでは資（史）料論に焦点を合わせていくことにしたい。

## 3. 「問題」の所在：アーカイヴァル・エポケー

本報告の題目は、実にストレートに、一体何を、なぜ、資（史）料として保存するのかと問うている。その含意は、「資（史）料を残した後に社会学者は何を為すのか」を考えてみたい、というものである。そして、そこにこそ、問題が横たわっていると報告者は考えている。その問題とは、“残せと言った方がいいが、「その後」がないではないか” というものだ。

説明しよう。「調査データを残すことは大切だ」「資（史）料の散逸を防ぐためにアーカイヴスが必要だ」「将来のために、資料集を編纂している」といった声をよく聞く。しかし、それらが残された後／資料集が刊行された後、実際にどの程度活用されているのだろうかという問いは、奇妙にもほとんど問われずにきているのではない。私見では、「資（史）料を残すべし」と言った途端に思考停止し、具体的にどのように資料を活用していくのか、いかにすれば活用しやすくなるのか、ほとんど深められずにきているように思えてならない。残せと言ったまま思考停止してしまい、とにかく残しさえすれば、後はどこかで誰かがきついつか活用してくれる——そんな「あなた任せ」な態度を、報告者は「アーカイヴァル・エポケー」と呼んでいる（もちろん、ここは古典ギリシャ語 [ἐποχή] の原義である「思考停止」ないし「中断」の意味で用いている）。確かに学問には、明日すぐに利用されるか 100 年後のある日に利用されるかは判らないが、その両方のために、とにかく記録を残しておくという使命がある。そのオープンネスと超長期的視野こそは、学問の極めて

重要かつ本質的な機能であると思われる。しかし、何を残すべきか、残す資（史）料をどのような形で残したら良いのかは、社会学内部では十分に問われずにきたのではない。かく言う報告者も、例外ではない。

しかし、この「アーカイヴァル・エポケー」状態は、観念的にも実際的にも大きな問題を惹起する。

観念的な水準での問題は、社会学という学問の捉え直しを遠ざけてしまうかもしれない、ということだ。学問が独立した一分野になるためには、おそらく、独自の入出力形式を備えねばいけないはずである。出力形式とは、もちろん社会学が生み出す諸理論・諸概念であり、言説群だ。入力形式は、何を有意味なデータと見なすか／見なさないかという一連の判断の集合を指す。「資（史）料を残したあとに何を為すのか」という問いかけの狙いは、この入力形式から、社会学の自省的捉え直しを図ろうというものでもある。「アーカイヴァル・エポケー」状態は、こうした狙いを無化してしまいかねない。

実際的な水準での問題は、アーカイブスの消滅という学問の存立基盤にかかわる深刻なものだ。とにかく残ささえすれば、あとは誰かが利用してくれるという「あなた任せ」の「アーカイヴァル・エポケー」状態は、「その資（史）料に価値はあるのか」という問いには一定程度、解答可能かもしれない。しかし、「予算がない」「あなたの言う通りこの資料を残したが、その後、誰も利用していないではないか」という直截な問いかけには対抗できまい。そこでは高邁な思想よりも、おそらく、プラグマティックな対抗言説が必要とされている。そして、そうした言説がない／用意してこなかったがゆえに、現存する国内のアーカイブスですら、存亡の危機に曝されているのではないか。

#### 4. 日米のアーカイブス経験から

もとより、報告者に解決策や妙案があるわけではない。したがって本報告は、リサーチ・ヘリテージをめぐる問題提起をすることが、主な任務となる。

具体的には、実際にサーチ・ヘリテージを収めたアーカイブスの設立に関わった経験（富士常葉大学図書館「飯島伸子文庫」、法政大学「環境アーカイブス」）からリサーチ・ヘリテージ保存の意義と若干の問題提起を、アメリカでのアーカイブス利用の経験（e.g., University of Maryland [College Park, MD], National Archives [Washington, D.C.], Columbia University [New York, NY]）をもとに、日本への示唆をすることとしたい。

その際には、リサーチ・ヘリテージの二次分析の可能性と困難性についても触れたい。特に質的調査データの二次分析は、量的調査データに比して未だ十分に展開されているとは言い難い。むしろ、残された原資料の山を前に、どのように解釈して良いのか見当がつかず、結局、ほとんど使わずに終わってしまうことが常である。そしてそれを正当化するために「やはり自分で入手した資料でないといけない」という頑な態度を帰結してきたように思われる。「質的調査・対・量的調査」という対抗軸が不毛な対立をもたらしてきたのと同様、「一次分析・対・二次分析」という対立を回避し、「アーカイヴァル・エポケー」を超えていくためにも、冒頭の問いをフロアとともに試論的に考察できれば、本報告はその任を果たしたといえるだろう。